

仏教をいかに学ぶか

——仏教研究の方法論的反省——

日本仏教学会編



平樂寺書店

禅学には方法論がありうるか？

Michel Mohr (ミッシェル・モール)

(花園大学)

一 はじめに

この論題は、やや挑発的な響きがあるかも知れない。一方では、どんな学問にも、どんな研究分野にも、当然、方法論があるはずだし、存在すべきであろう。しかし、他方ではそんなに簡単ではない。まず何を「禅学」と呼ぶか、そしてどんな方法でもいいのか、という問題が浮上してくる。そこで、禅学に対して還元主義に陥ることのない、いわゆる「建設的な」アプローチを模索するためにこのトピックを選ぶことにした。

「禅学」の範囲に話を限定することに努めていくが、むしろ仏教学全体に関わるテーマが含まれている。その中で「修行の位置づけ」という問題は、避けて通れない難関の一つである。すなわち実践の面を抜きにして仏教を語ることはできるかどうか、これが宗教と哲学の接点を考える上では最大の問題だと思われる。これに関して誤解を避けたいが、ここでいう「行」の意味は、修行するかどうか、ということではない。仏教や禅の学問的な研究において、その研究対象の「行」という側面をも視野に入れて考慮するかどうかの選択が問題である。私は禅学における方法論の確立という大きな課題への即時回答を提出できる者ではないが、いくつかの比較的新しい方法論を取り上げること

よって、その微妙な問題を考えていくための材料を提供できればと思う。

それに先立ち、まず解釈学で言う「自分の解釈学的な立場を明確にする」(clarify one's own hermeneutical situation)義務を感じる。ヨーロッパの大学では、日本と同じく、仏教学においては堅い文献学が主流である。したがって、私は決して最近の哲学のはやりに精通しているわけではない。むしろ流行を警戒する癖がある。しかしそれとにも、たとえば「誰々の一生とその著作」という類の研究成果では物足りない、と思わざるを得ない。そして分析のメスを入れる必要を疑わないと同時に、どのメスを使うかによって結果が全然違うということにも気づかされる。そこで基礎研究を軽視しない「方法論」が求められる。このため、私の立場は古典的な仏教学から方法論の重要性を自覚しはじめた観点と考えていただいて結構である。故に、基礎教育をヨーロッパで受けたからと言って異風の発言を期待されても困る。というより西洋哲学に疎い伝統的な仏教研究者の立場から拙稿を書いたと考えていただいた方が正しい。さて、方法論について言及する前に、ここで言う「禅学」の意味を一瞥しなければならない。

二 禅学という言葉とフィールドの存在理由

今までの定義とその限界

「禅学」という言葉には異なる解釈が目立って、この分野の輪郭をぼんやりさせていることを、残念ながら否認めない。だから曖昧な使用を避けて、むしろ「禅研究」と言った方がさっぱりすると言えよう。しかし、「禅学」という用語が実際に使われてきたので、その発展を少し振り返ってみる必要がある。

古典的な理解

漢訳經典には、熟語としての「禪學」は見当たらない。たとえば三世紀に無羅叉が訳した『放光般若經』には「菩薩以禪學内外空及有無空」(菩薩、禪を以て内外の空及び有無の空を学す)とあるように、「禪」は「学」する方法であるが両語は同等に扱われていない(T. 8 No. 221 p. 125a01-02)。「禪學」を熟語として扱っている文献として慧皎(四九七―五五四)の『梁高僧傳』は初出の可能性が高い(T. 50 No. 2059 pp. 343c22, 343c24, 396a16)。その三つの用例では、「修行者」という意味で用いられていることに間違いはない。たとえば最初の用例では「處處弘道禪學成群」(処処に道を弘め、禪學は群を成す)といい、修行者が群がる様子が描かれており、この言葉は人を指している(p. 343c22)。禪籍として九五二年に成立した『祖堂集』の二つの用例も人を意味する(5.064, 11; 5.085, 02)。

唐代には、『傳心法要』に「參禪學道」(T. 8 No. 2012A pp. 382b11, 383c08)、そして『臨濟錄』に「學禪學道」(T. 47 No. 1985 p. 497c17)という表現が使われるようになり、その四字は「修行」(參禪)を示す。「禪學」という言葉が定着するのは『景德傳燈錄』(一〇〇四年成立)前後に当たる。『景德傳燈錄』巻九にも「天下禪學若輻湊焉」(天下の禪學、輻湊するが若し)とあって、修行者が四方八方から多く集まり来ることを言う(T. 51 No. 2076 p. 264c17)。以上の北宋までの文献では、「禪學」が「禪を実践する者」だけを指すことが明らかである。しかし、いつのまにか「禪學」が普通名詞化し、そしてさらに禪を研究する学問という意味を含むようになった。

近世・近代以降の日本での理解

北宋以降の中国における「禪學」の発展は省略するが、江戸時代の日本において、禅僧が書いた文章には主に「參禪學道」が見られる。しかし、白隱慧鶴(一六八六―一七六九)の著作には、いくつか興味深い「禪學」の用例がある。

禪學には方法論がありうるか? (Michel Mohr)

『遠羅天金』^{おらてがま} 巻上は大名に送った書簡の形を取っているが、その中に「書中少しにても取るべき處あつて、殿下の道情をも助け増して、禪學成熟し玉はど、其の餘波必ず左右の人々に及ばん。」とある。⁽¹⁾ または「於仁安佐美」^{おにあさみ} 巻上に「古へ、禪門の盛んなりし時、禪學に心をつくせん士大夫は、打頭に傑烈勇猛の憤志を震つて、無明の暗窟を劈破し、生死の業根を踏斷して、…」とある。⁽²⁾ いずれのテキストにも「禪學」は明らかに「禪の実踐」を意味する名詞として使われており、現代的な用法の一つがすでに定着していることを示す。

一九世紀後半に入ると、学問的な仏教学が確立されるように至る。その新しい研究領域に倣って、二〇世紀前後に「禪学」という学問めいた分野が現れる。しかし、たとえば織田得能（一八六〇―一九二一）の『佛教大辭典』は「禪學」を「禪家の學。見性成佛の法なり。」と定義するに止まり、日本近世の意味にしか触れない（二〇五七頁）。織田氏が自決してしまったのが明治四四（一九一一）年なので、彼が活躍していた時代には「禪学」は「修行」の意味だけを持っていたことになる。同時に、中国語の古典的な「修行者」の義はすでに見失われていた。一九二八年には忽滑谷快天（一八六七―一九三四）の『禪學批判論』が重刊される。序文には「明治三十八年十月、予齡四十載にして本書を撰す」というから、これも一九〇五年に書かれ、明治末期の思想を反映している。その中に、「凡そ宗派的僻執ほど卑陋なるものはない」（四七頁）などと言って、当時として革新的に聞こえる文句がある傍ら、「健全なる禪宗の信仰」（十九頁）を謳う説教の書という色が濃い。⁽³⁾ この本の題名で言う「禪學」も「禪の実踐」を指して「禪は參すべくして講すべからず」と主張している（一頁）。

そうすると、「禪学」に「修行」と「講学」の両方の意味が併用されるようにいたったのは、いつごろからだろうか。境目は定めにくい⁽⁵⁾が、少なくとも太平洋戦争直後に始まった久松眞一（一八八九―一九八〇）の講義の時には、

その両義がはっきり自覚されていた。「禪學即今の課題」という講義ノートには次の一節がある。

「初めに方法的なものとして禪學といふことの意義、目的などについて概説しておきたい。先づ、禪學と云ふ言葉の意義について、私は大體二つに分けて考えられると思ふ。その第一は、所謂普通禪宗學と呼ばれるような學問的、知的意味で云ふ場合で、第二は禪堂で修行することを、禪學をやる⁽¹⁾と云ふように、行的、實踐の意味で用ひられる場合である。そして更に知的學問的な意味としての禪學と云ふ場合には、禪の事實的な研究即ち史學的研究と、哲學的、理論的研究とに分けられよう。」久松眞一、「禪學即今の課題」、『禪文化研究所紀要』一号（一九六九年、三頁）⁽⁶⁾

これを手掛かりに、現代の「禪學」という言葉に込められている「実践」と「學問」の両義性が一九二〇年代から一九四〇年代の間に確実なものになったことが判る。久松のように「実践」と「學問」が不可分だということを示そうとする場合、この用法は確かに便利である。だが、これが「禪學」の対象や目的を曖昧にしまったことも否定しにくい。さらに「禪宗」が仏教から切り離されたことによって、「禪學」の含みが不明瞭になってしまった。全体として、「禪學」の曖昧さの原因に関して次の四つの問題が考えられると思う。なお、久松に従うと「禪學」の一つの意味が「禪宗學」なので、「禪宗」の真意も問わなければならない。

△「禪宗」の《特別扱い》は色々な誤解の元になっており、「禪宗」という呼称自体が問題。

△「禪宗」を「禪の宗旨」という用法以外に、宗派の意味で用いることが適切ではない。⁽⁷⁾

△學問に限定された意味の「禪學」というものがまだ確立されていない。

△「禪」と自称するさまざまな伝統や流派に等質性をどこまで認められるか。

禅学の対象と特徴

学問としての禅学の対象と特徴について、以上の曖昧な側面を取り除けば、禅学というフィールドの存在理由は、仏教学の中で特定の時代、特定の教団とその思想、修行体系、文献や他の遺産に焦点を当てるところ以外には認められないことになる。したがって、「禅学」を「仏教学」の下位区分と見なすことに差し支えがないかぎり、方法論も仏教学、あるいは宗教学に共通するはずである。

研究動向と方法論の新思潮

さて、もちろんすべての研究方法が一致するわけではないので、いくつかの新しい研究動向を取り上げることしよう。最近、仏教学、あるいは禅学と深く関わってきた新しい方法論は概ね三つに分類できるかと思う。

A ポストモダーニズムに基づいているアプローチ、

B 解釈学の再発見を唱えるアプローチ、

C 日本の批判仏教。

当然、あらゆる研究動向の詳細を網羅することは不可能なので、あくまで便宜上この図式的な分類を用いる。ただ、なるべくそれぞれの研究態度、もしくはその根底にある前提を浮き彫りすることができれば、さらなる追究がしやすくなるかも知れない。総合的な「研究現状」および個別的な研究成果については枚挙にいとまがないので、代表的な著作をいくつか参考文献に載せておいた。そして、文献学的、あるいは史学的アプローチが依然として大多数を占めていることは論を待たない。

A ポストモダーニズムに基づいているアプローチ

まず、ポストモダーニズムに基づいているアプローチで禅学に関わっている研究者の代表として、Bernard Faure (ベルナル・フォール)、Steven Heine (スティヴェン・ハイン)、Steve Odin (スティヴ・オディン)、と Dale S. Wright (デール・ライト) が挙げられる。四人とも、Michel Foucault (ミッシェル・フーコー、一九二六―八四) や Jacques Derrida (ジャック・デリダ、一九三〇―) を特に重視している。彼らはテキストの脱構築 (deconstruction デコンストラクション、解体理論とも) という方法を仏教、とりわけ禅仏教に応用しようとする。

さらにフォールはポスト構造主義の時代をリードしたとされる社会学者 Pierre Bourdieu (ピエール・ブルデュー、一九三〇―) の研究成果を活用している。ブルデューの思想に関しては、「その著作を貫く軸は、私たちの知覚や判断や行動をさまざまな形で拘束し誘導している不可視の権力作用、すなわち《象徴支配》のメカニズムを説明することにある」という研究動機の要約ができる⁽⁸⁾。それぞれの研究者により、取り上げる具体的なテーマが違うので一概に言えることは少ないが、それまで隠されてきた側面を真つ向から分析しようとする態度は共通して見られる。仏教学や禅学に、史学や、文化人類学、哲学と社会学などを導入することで、斬新な見方が生じてきていると言えよう。

フォールは特にそうで、『頓悟のレトリック』(一九九一年)の後に、続々と『仏教における性の問題』(一九九四年、一九九八年に英語版)、『瑩山紹瑾の幻想世界と権力との関わり』(一九九六年)などを発表している。この批判的な研究成果が、欧米の禅研究に計り知れない反響を呼んでいることは、もはや確実である。ところが、フォールの最近の著書に対する厳しい書評⁽⁹⁾が示しているように、デリダの文学評論と同様、実地から離れた想像だけの仏教批判になりかねないことも指摘される。

B 解釈学の再発見

次に、仏教学や禅学に影響を及ぼしはじめている哲学の流れとして、解釈学を挙げることができる。二〇〇〇年に百歳に達した西洋哲学の長老である Hans-Georg Gadamer (ハンス・ゲオルク・ガダマー、一九〇〇-) は日本でもよく知られている。ガダマーは Martin Heidegger (マーティン・ハイデッガー、一八八九-一九七六) の後輩で、ハイデッガーが唱えた「形而上学の死滅」という一種の哲学の行き詰まりを超えようと努力を続けてきた人である。そして「経験」という概念に留意して、「解釈学的経験」という考えを打ち出している。その認識論と言語の役割を重んずる態度は何人かの仏教学者に注目されている。その中に、たとえば Buddhist Hermeneutics (一九八八年、仏教的解釈学) という論文集を編集した Donald S. Jr. Lopez (ドナルド・ロンス) がいる。

一九九九年にちょうどガダマーの解釈学と禅に関する学位論文が発表された。Gisèle Gingras (ジセル・ジャングラ) 1999. *Le Rôle du langage dans l'éveil bouddhique : Une herméneutique du kôan zen* (仏教の悟りにおける言語の役割—公案禅の解釈学—) Doctorat, Faculté de Théologie, Université de Montréal, Montréal (モントリオール大学の神学部)。本人は「無門關」を主な資料として使って、ガダマーの解釈を応用してみた。しかし、哲学の方に重点を置いているため、禅研究から見ると説得力を欠く分析に終わってしまい、残念である。日本では、解釈学の再発見という動きは哲学に関心を持つ人々の間で、いち早く察知された。ガダマー著作の邦訳がすでに豊富で、その専用のホームページが設置されているほどである。⁽¹⁰⁾ しかし、仏教学でその流れを本格的に汲んでいる研究はまだ聞いたことがない。⁽¹¹⁾

とにかく、ガダマーと言えば、すでにほとんど古典的な存在になっており、解釈学の方で研究を続けている倫理

派も大活躍している。その代表者の一人は二〇〇〇年に京都賞を受賞した Paul Ricœur (ポール・リクール) である。その主著は日本語にも翻訳されはじめている。そのうち、『他者のような自己自身』(Soi-même comme un autre, 1990) は仏教を特に意識しないが、我々の研究分野に対しても貴重な論理を提案している。主体の哲学の肯定と否定という二重の遺産⁽¹²⁾に関する考察は特に興味深く読み取れる。哲学と仏教学の接点で実りある方向を模索するなら、彼は取り上げるのに最適の人物の一人ではないかとすら思える。しかし、私が知っている範囲では、まだリクールに基づいたアプローチを唱える仏教学者は出現していないようである。⁽¹³⁾何しろ、このように哲学と宗教学、場合によって仏教学または禅学に至るまで、方法論が幅広く論じられている時代になってきた。その密接な関わりの重要性を指摘する反応はいくつか現れている。

たとえば Seyfort D. Ruegg (シーフォート・ルエグ) 氏は Some Reflections on the Place of Philosophy in the Study of Buddhism (一九九五年、仏教研究における哲学の位置について) という論文で主な課題を浮き彫りにした。この論文が掲載された The Journal of the International Association of Buddhist Studies (国際仏教学会誌) の方法論特集 (On Method) には、主にインド仏教とチベット仏教の研究者が議論を交わしているが、仏教学全体に通じる含みが見受けられる。従来の方法論は、ただ古典的文献学 (classical philology) と歴史的実証哲学 (historical positivism) という二本柱で構成されていたのに対し、最近のアプローチの多様化によって、幸いにもこの図式は崩れかけているようである。日本でも、方法論を問ひ掛ける傾向が強まり、仏教学全体に揺さぶりを掛ける動きは確実になりつつあり、日本仏教学会の本年のテーマ自体もそれを象徴している。最後に、同じ傾向を示すもう一つの兆しとして、いわゆる「批判仏教」を取り上げてみたい。

C 批判仏教

正確には、一言で「批判仏教」と言っても、まとまった研究者のグループを指すことができなかったことは、ご承知の通りである。松本史郎氏は二〇〇〇年二月に発表された『道元思想論』（大蔵出版）の冒頭に「私は袴谷憲昭氏と袂を分かつたざるを得なくなった。それ故、今後は研究者の方々が、私の仏教理解を氏の造語である『批判仏教』の名をもって呼ばれることのないよう願っている。」と書いている（iii頁）。ご希望に沿うことは理想的だが、この表現がすでに大分定着しており、それに代わりうる適切な総称をまだ見つけていない。「日本の批判的仏教研究」という言い回しがくどいし広すぎるので、敢えて「批判仏教」を用いた。

この類の批判的な研究がもはや洋の東西を問わず、色々な興味深い議論に発展していることは注目に値する。特に南山大学で編纂された *Pruning the Bodhi Tree: The Storm over Critical Buddhism*（菩提樹の剪定―批判仏教に関する嵐 Hubbard, Jamie, and Paul L. Swanson, eds. 1997）という論文集はそれを語っている。

日本で仏教の新しい批判的考察が本格的に始まったのは一九八〇年代からなので、ほぼ二十年の歳月しか経っていない。したがって、その発達途中にある研究動向を総合的に分析するのは、まだ早いということも確かである。ただし、その反省を促したコンテキストは比較的良く知られており、これを歴史的出来事として見ることも可能であろう。

曹洞宗における反省の直接のきっかけは一九七九年の「町田宗夫発言事件」だった。当時「World Conference on Religion and Peace」（世界宗教者平和会議）の場で部落問題を否定した曹洞宗の宗務総長、町田宗夫氏の発言は大変大きな波紋を⁽¹⁵⁾広げた。それに続いて、衝撃を受けた曹洞宗に反省が芽生え、大逆事件で処刑された内山愚童（一八七四―一九二一）の僧籍除名を取り消すことにも繋がる。つまり、倫理観に関する問い掛けが出发点で、それに対する

仏教学者の研究態度が具体的に問われたことがコンテキストにあたる。伊藤隆寿氏、袴谷憲昭氏、そして松本史郎氏が三人とも駒沢大学の出身だということも決して偶然ではないと思われる。

ここで、仏教学者がようやく倫理の問題を自覚し始めたことを高く評価する必要がある。その必要性は、さきほどのポストモダン・ニズムの強調するところでもあり、中立を保持する学問という考え方が一種の錯覚だと指摘する声は、解釈学からも広く聞こえるようになった。学者が判断を保留する、というマックス・ウェバーの研究態度が袴谷氏の批判を受けることも不思議ではない。⁽¹⁶⁾ 認識論的に考えても主観的な投影を完全に拭い去ることは不可能だが、「一人合点」がどこまで許されるかという「境目」の微妙なニュアンスを見落とすことも極めて危険である。いずれにせよ、問題意識が生じたこと自体は重要で、そのお蔭で仏教と軍国主義との協力、あるいは差別との関わり、つまりタブーだったテーマを論じることが一般的に認められつつある。海外で仏教の倫理問題に対する風当たりが強いだけに、批判仏教がそれに答える努力をしていることは、一つの使命感であろう。⁽¹⁷⁾

袴谷氏と松本氏は倫理意識の欠如がどこから生じたかという原因を追及するうちに、「dharma-vāda」という研究仮説を採択するようになった。後の解釈の仕方が違うにしても、ここまでは共通の歩みと見ても差し支えなさそうである。袴谷氏は、松本氏が発見したこの概念を浮き彫りにするために、デカルト (René Descartes 一五九六—一六五〇) とヴィーコ (Giambattista Vico 一六八六—一七四四) を対比させて、前者を「批判の哲学」、そして後者を「場所の哲学」の代表者として扱っている。この観点を次の文章で説明している。

「この、私による、二者対峙的な命名法は、西洋の哲学において対峙的に用いられる『批判の哲学』 (critical philosophy, kritische Philosophie)」、対『場所の哲学』 (topical philosophy, topische Philosophie) の呼称から借用された

もので、従って、呼称上からいえば、『批判仏教』は critical Buddhism を想定し、『場所仏教』は topical Buddhism を想定して訳されたものとお考え頂ければよい。しかも、この際、哲学であれ仏教であれ、内容的により一層重要なことは、『批判 (critica)』対『場所 (topica)』という対峙なのである。袴谷憲昭『批判仏教序説—『批判の哲学』対『場所の哲学』』『批判仏教』(大蔵出版、一九九〇年)、四頁(傍点は筆者による)。

この引用で氏の研究態度を良く表す表現が見られる。まず「対峙」という言葉が頻繁に使われていることは、トボスとクリティカが思想の解説に使う根本的な概念であり、それを対立するモデルとして採択したことを印象づける。これはまさに構造主義で使われる解説の図式を思い出させる。すべてのものをこの二元に還元させることによって、明瞭な分類が出来上がる。この引用から演繹できるもう一つの気づきは「哲学」と「仏教」が同じレベルで扱われていることである(「哲学であれ仏教であれ」というところはそれを表す)。

デカルトとウィーコのそれぞれの立場がそんなに明確だったかどうかに対する疑問は別として、トボスを諸悪の根源のように受け止めることもこの著作の特徴である。なぜ「絶対」の表現をそれほど恐れているのか、さまざまな推定が可能であろう。少なくとも、トボス恐怖症が「dhatu-vāda」説と密接な関係にあることが理解の手掛かりとして役立ちそうである。袴谷、松本両氏の発想を位置づけるため、多少山口瑞鳳氏の影響を受けたことを指摘しなければならぬ。同氏のチベットに関する研究業績の中で「摩訶衍の禅」とそれにまつわる論争に関する論文は広く知られている(山口、一九八〇年)。十七年後に同じテーマに関する新しい文章が英訳された(Yamaguchi, 1997)。その中で山口氏は Santaraksita (寂護) の *Madhyamakāntaryāka* と Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* を主な典拠として仏教の正当の教義に関する話を進めている。「正しいインド仏教」の立場とされる教えを要約している。彼による第一の

ポイントは「The purpose of Buddhism is not "liberation" (*mukta, vimokṣa*) but the realization of "wisdom" (*bodhi*) for the practice of "great compassion" (*mahākaruṇā*).」(仏教の目的は「解脱」ではなく、大慈悲を實踐するための「智慧」(*bodhi*)である。)[和訳と傍点は筆者による]。そこまで言い切れるには、相当の裏付けがあるはずであるが、なぜ「目覚め」を意味する「*bodhi*」を「智慧」に置き換えるか、根拠を一つも挙げていない。チベット語を介しての何らかのねじれた解釈だろうが、それを調べようと思っても確認のしようがない。つまりこの発言をした研究者の辿った道を再現することは不可能である。

なお、袴谷、松本両氏の決裂以来、松本氏の二〇〇〇年九月三〇日の発表では「袴谷氏が」批判対象の確認を欠いているが故に、無意味だ⁽²⁰⁾という主張が見られる。それと同時に松本氏は自分が「西洋崇拜(正宗白鳥)の系譜に属すること」を告白し始めた。⁽²¹⁾これは興味深い現象であるが、仏教の理解とどういう関係があるか、西洋哲学の乱用を意味するのか、仏教側から問いかけたいところである。

松本氏が直接に「禅思想」というテーマについて執筆されたことも周知のとおりであるが、その中にはいくつかの方法論に関わる問題が含まれている。ここでは三つだけ、論点で疑問に感じるところを取り上げたい。まず氏は「禅」を次のように定義する。

「私見によれば、禅とは《思考の停止》を意味し、《思考の停止》を目指すものであると思われる。そして、もしそうであるとすれば、智慧が思考よりなることは明らかであるから、禅が智慧を否定するものであることも、また確実であるということになる。」松本史郎『禅思想の批判的研究』(大蔵出版、一九九四年)、三頁。

これについて「智慧が思考よりなることは明らかであるから」という前提は問題の一つである。何を「思考」と呼ぶ

のか、「citta」を示すものなのか、概念的認識なのか、明らかではない。後にこの著書に出てくる摩訶衍の「不思議観」(amanaskāra) (一九二〇、三一頁)を念頭においていることは推定できる。しかし、摩訶衍の立場が決して中国禅を代表するものではない、ということはどこにも見当たらない。摩訶衍や神会が後代の禅宗史において批判の対象になることも論じるべきではなからうか。さらに、松本氏はPatañjaliの有名な*Yoga-sūtra*『ヨーガ・スートラ』の冒頭にある「ヨーガとは、心作用の停止(citta-vṛtti-nirodha)である」という定義にも言及している。⁽²²⁾これはdhyānaよりもsamādhiの状態を指していると言えるが、時代が下がると断っておいても、仏教の影響を受けて成立した「ヨーガ・スートラ」を釈尊の禅定思想の根拠として挙げることの妥当性が疑える。もちろん、テキストの成立年代と口頭伝承という長い歴史を持つ伝統を区別して、この問題を検討しなければならない。氏のこの発想はさらに発展する。「…おそらく釈尊その人が、『思考の停止』を意味する禅を仏教の修道論のわくぐみの中に取り入れたとき、仏教は、知慧を否定することによって、その知慧の対象である仏教そのものを本質的に否定する契機を、仏教の中に取り込んでしまったものと思われる。」前掲書四頁。

釈尊が戒・定・慧の三学を説いたということを踏まえた上で、それがすでに一種の矛盾を孕んでいるとすれば、一体何を「原始仏教」と呼べるのだろうか。これは常識から考えても、方法論から見ても、強引な発想である。それに関連して氏は大切な発言をしている、

「釈尊が何を説いたかということは、文献の中からそれを直接引き出すことは、絶対に不可能であろう。この意味で文献学的方法には、限界がある。」前掲書 六五頁。

文献学の限界を指摘することはありがたいが、それを認めるなら、釈尊が説いたことに対する憶測はどこから引き出

せるのだろうか。それも確認できないが、思い付きだろうか。

さらには、それらの発言以上に、「禪」あるいは「禪思想」が、あたかも一つであるかのような扱いに問題があるように感じられる。最初に私は禪の「等質性」をどこまで認められるかという疑問を表したが、初期仏教の jhana をそのまま現在の禪と同視する図式の妥当性を疑わざるを得ない。同じインド仏教の中にあれだけ変遷が認められるのに、中国と日本の歴史とともに歩んできたそれぞれの宗派や伝統とその「禪」の理解が不変のままだったのだろうか。中国禪の様々な系統の間に多くの議論が交わされたことも無視できないと思われる。むしろ、禪定の原点が釈尊、またはそれ以前に溯ることに間違いないだろうが、その後の理解の多様化、あるいは中国の文化的背景は多少とも「禪」の位置付けや特色との関連が深いはずである。

また全体にわたる興味深い問題提起として、一元論が仏教の中に忍び込んだかどうかという課題がある。ヨーガの目指すものとインドの初期仏教の目指すものが同じだったかどうかは、さらなる研究を必要とする。

三 建設的な方法論の模索

学問の破壊力と責任

以上提出した率直な疑問はあくまでも方法論の主題に現実味を持たせる手段にすぎない。そもそも学問には、優れた破壊力が備わっていると言える。分析が鋭ければ鋭いほど、資料の操作の仕方さえ知っていれば、どんな反論でも作りだせる。研究対象の真相を追求するかどうかとは別に、説得力の有無ということが重視され、レトリックが独り歩きすることも珍しくない。逆に、たとえ論争を嫌って、慎重な沈黙を保とうと思っても、場合によってはそれが共

犯罪につながる可能性さえある。戦争状況に置かれた学者が、今になって責任を問われることが多い所以である。方法論に関する議論はまさに過去の反省から実ってきている。だからこそ、方法論だけを論じて空回りするような極端と、狭い研究範囲しか見えない研究態度との間を行く、中道のようなものが求められる。その方向性を示唆するエリーアーデの文章を改めて吟味して、話を宗教学に広げてみたい。

宗教学の鉄則

「十九世紀のある種の混乱によって深刻な危険にさらされていたある原理、すなわち〈現象をつくりだすのは尺度である〉という原理を近代科学は復活させた。アンリ・ポアンカレは皮肉まじりに、〈象を顕微鏡を通してしか研究したことのない自然科学者は、はたしてこの動物を十分に知っているのだろうか〉と問いかけた。⁽²³⁾

顕微鏡は細胞の構造やメカニズムを示してくれるが、それはあらゆる多細胞生物において同一の構造であり、メカニズムである。象もたしかに多細胞生物ではある。だが、象はそれのみだろうか。顕微鏡的尺度では、どっちつかずの回答しか得られない。⁽²⁴⁾人間の視覚は、少なくとも象を動物学的現象として認める利点をもつのであるから、この視覚の尺度からは、もはやどっちつかずの回答というものはない。同様に、宗教現象が宗教現象として現われるのは、それ固有の様態において把握される、つまり、宗教という尺度で研究される条件においてのみである。宗教現象を、生理学、心理学、社会学、経済学、言語学、芸術、などによってとりかこもうとするのは、それ自体にそむくことである。それはまさに宗教現象にある唯一独自のものの、他に還元できないもの、つまりその聖性を逃してしまうことである。たしかに、《純粋な》宗教現象というものはなく、ひたすら宗教的のみという現象はない。そもそも宗教は人間的事象であるからして、それは社会的事象でも、言語学的事象でも、また経済学的事象でもある。なぜなら人間を言語や集団生活からはずして思いうかべることはできないのであるから。だが、最終的に人間を規定する基本的機能の

どれか一つによって宗教を説明しようとしてもむだであろう。」エリアーデ・ミルチャ『エリアーデ著作集第一巻 太陽と天空神 宗教学概論Ⅰ』久米博訳、せりか書房、一九七七年、一九―二〇頁。⁽²⁵⁾

この引用はエリアーデの『宗教学概論』の冒頭にあるもので、その研究態度、方法論の基礎を示していると言っている。「尺度」の問題は、もちろん認識論の重要性を意識した発言である。宗教を宗教的に理解することから、仏教も仏教的に、そして禅も、いわば「禅的に」研究することが必要条件とされている。ここにデカルトの合理主義がもたらした限界も明らかに現れている。哲学には、独特の方法と狙い⁽²⁶⁾があつて、それが宗教の問題において混用されてしまうことへの警戒としても以上の文章を受け止めることができる。もっと単純に言い換えれば、哲学的な疑問には哲学的な答えしか得られないということである。

禅学への応用

以上の考察の末、最初の禅学というフィールドだけに話を限定した場合に、具体的な研究方法に関する幾つかの帰結が得られる。まず、従来の研究の大半が近代以降の宗派というフィルターに縛られているのとは裏腹に、過去に「純粹禅」を想定する傾向が多く見られる。それを是正するため、「禅」という研究対象の多様性をもっと自覚する必要があると思われる。宗派の壁という制約を超えようとする努力とともに、等質性を常に問い掛ける姿勢が求められる。

次に、禅学において、文献学的なアプローチは依然として価値はあるものの、それには限界があると認め、原文を解説するだけで精いっぱいという事態もありうるが、ただそれだけで物足りない指摘しなければならない。つまり、いくら厳密な研究でも、それを意義づける問題意識や、思想背景の中にそれを浮き彫りにする方法を考えないとその

価値が半減してしまう。ここは他の研究分野が補助的な役割が果たせるところである。

禅学、仏教学、あるいは宗教学までも含めて、新しい方法論を考えることで貴重な刺激が得られる。しかし、その方法がたとえば哲学分野に由来する場合、それを唯一の尺度として使うことは次元のズレを生じさせてしまう危険がある。だから禅学においても方法論を大いに論じる必要があると思うと共に、それに陶醉してしまわないことをまず自分に言い聞かせたい。

四 むすび

「禅学には方法論がありうるか？」という疑問に対して、方法論の探求を深める必要があると肯定することができる。ただ、虚心に研究対象に取り組むことも要求される。研究仮定を立てることが重要であると同時に、あらかじめ設定した分類によってすべてを決めつけることは学問的追究の妨げに繋がることも事実である。そのバランスの基準として、自然科学と同様「再現性」が最も大切な要素であると言える。根拠を明確にすれば、他の研究者が同じ道のりを辿って、分析の方法を検証した上で似た結論に至ることは単なる理想ではないはずである。

出だしの所に「どんな方法でもいいのか」という疑問を投げ掛けた。これに対しては、制限付きの否定という答えに至る。選択の自由を認めたくて、学界で認められるものには最小限の二つの条件があると思う。一つは研究対象の尊重である。仏教や禅研究の場合、これは当然「行」を考慮に入れることを含む。もう一つは以上の「再現性」である。これから、その方向を目指して、停滞しがちな禅学が活発化することを期待してやまない。

参考文献

和書

伊藤隆寿『中国仏教の批判的研究』（大蔵出版、一九九二年）

ガダマー・ハンス・ゲオルク『真理と方法―哲学的解釈学の要綱』（法政大学出版局、一九八六年）〔現時点では3巻のうち第1巻だけが既刊で、第二巻は近刊する予定〕

シャーフ・ロバート・H『禅と日本のナショナリズム』日本の仏教4、八一―一〇八頁（法蔵館、一九九五年）〔Chart 1993 の記〕

忽滑谷快天『禅學批判論』（鴻盟社、一九二八年）

袴谷憲昭『本覚思想批判』（大蔵出版、一九八九年）

袴谷憲昭『批判仏教』（大蔵出版、一九九〇年）

フォール・メルナール『アメリカにおける禅研究の展望』『中外日報』平成九（一九九七）年一月一日、十一面〔Faure 1994a の要約〕

松本史郎『縁起と空如来蔵思想批判』（大蔵出版、一九八九年）

松本史郎『禅思想の批判的研究』（大蔵出版、一九九四年）

松本史郎『道元思想論』（大蔵出版、二〇〇〇年）

リクルール・ポール『他者のような自己自身』叢書・ウニベルシタス530（法政大学出版局、一九九六年）

山口瑞鳳『摩訶衍の禅』、篠原寿雄・田中良昭編『講座敦煌8 敦煌仏典と禅』（大東出版社、一九八〇年）、三七九―四〇七頁

洋書

Abe, Masao, and Steven Heine. 1991. *A Study of Dogen : His Philosophy and Religion*. Albany : State University of New York Press.

Allen, Douglas. 1978. *Structure and Creativity in Religion : Hermeneutics in Mircea Eliade's Phenomenology and New Directions*. Edited by J. Wardenburg. Vol. 14, *Religion and Reason*. The Hague : Mouton.

禅学には方法論がありうるか? (Michel Mohr)

- Faure, Bernard. 1988. *La Volonté d'orthodoxie dans le bouddhisme chinois*. Paris : Editions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- . *Le Bouddhisme Ch'an en mal d'histoire : Genèse d'une tradition religieuse dans la Chine des T'ang*, Publications de l'Ecole Française d'Extrême-Orient ; v. 158. Paris : Ecole Française d'Extrême-Orient.
- . 1991. *The Rhetoric of Immediacy : A Cultural Critique of Chan/Zen Buddhism*. Princeton, New Jersey : Princeton University Press.
- . 1993. *Chan Insights and Oversights : An Epistemological Critique of the Chan Tradition*. Princeton, New Jersey : Princeton University Press.
- . 1994a. Aperçu sur les études Chan/Zen aux Etats-Unis. *Cahiers d'Extrême-Asie* 7 : 411-435.
- . 1994b. *Sexualités bouddhiques : Entre désirs et réalités*. Aix-en-Provence : Le Mail.
- . 1996. *Visions of Power : Imagining Medieval Japanese Buddhism*. Translated by P. Brooks. Princeton, New Jersey : Princeton University Press.
- . 1997. *The Will to Orthodoxy : A Critical Genealogy of Northern Chan Buddhism*. Stanford, Calif. : Stanford University Press.
- . 1998a. *Bouddhismes, philosophies et religions, Essais*. Paris : Flammarion.
- . 1998b. *The Red Thread : Buddhist Approaches to Sexuality*. Princeton, N. J. : Princeton University Press.
- Fu, Charles Wei-hsun, and Steven Heine, eds. 1995. *Japan in Traditional and Postmodern Perspectives*. Albany : State University of New York Press.
- Gadamer, Hans-Georg. 1996. *Vérité et méthode : Les grandes lignes d'une herméneutique philosophique*. Translated by P. Fruchon, J. Grondin and G. Merlio. Edited by A. Badiou and B. Cassin, *L'Ordre philosophique*. Paris : Seuil. Original edition, *Wahrheit und Methode : Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*.
- Gingras, Giséle. 1999. Le Rôle du langage dans l'éveil bouddhique : Une herméneutique du *kōan zen*. Doctorat, Faculté de Théologie, Université de Montréal, Montréal.

- Gómez, Luis O. 1995. Unspoken Paradigms : Meanderings through the Metaphors of a Field. *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 18 (2) : 183-230.
- Heine, Steven. 1994. *Dōgen and the Kōan Tradition : A Tale of Two Shōbōgenzō Texts*. Edited by S. A. Wawrytko, *SUNY Series in Philosophy and Psychotherapy*. Albany : State University of New York Press.
- . 1997. Critical Buddhism and Dōgen's Shōbōgenzō : The Debate over the 75-Fascicle and 12-Fascicle Texts. In *Pruning the Bodhi Tree : The Storm over Critical Buddhism*, edited by J. Hubbard and P. L. Swanson. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- . 1997. *The Zen Poetry of Dōgen : Verses from the Mountain of Eternal Peace*. 1st ed. Boston, MA : Tuttle.
- . 1999. *Shifting Shape, Shaping Text : Philosophy and Folklore in the Fox Kōan*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Heine, Steven, and Dale S. Wright, eds. 2000. *The Kōan : Texts and Contexts in Zen Buddhism* : Oxford University Press.
- Heisig, James W., and John C. Maraldo, eds. 1994. *Rude Awakenings : Zen, the Kyoto School, & the Question of Nationalism*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Hori, G. Victor Sōgen. 2000. Bernard Faure. *The Red Thread : Buddhist Approaches to Sexuality* [Reviews] . *Japanese Journal of Religious Studies* 27 (1-2) : 153-159. [Faure 1998b 紅糸の繙語]
- Hubbard, Jamie. "Topophobia." In *Pruning the Bodhi Tree : The Storm over Critical Buddhism*, edited by Jamie Hubbard and Paul L. Swanson, 81-112. Honolulu : University of Hawai'i Press, 1997.
- Hubbard, Jamie, and Paul L. Swanson, eds. 1997. *Pruning the Bodhi Tree : The Storm over Critical Buddhism*, Nanzan Library of Asian Religion and Culture. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Huntington, C. W., Wangchen Namgyal, and Candrakīrti. 1989. *The Emptiness of Emptiness : An introduction to Early Indian Mādhyamika*. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- Lin, Chen-kuo 林國國. 1997. Metaphysics, Suffering, and Liberation : The Debate between Two Buddhisms. In *Pruning*

- the Bodhi Tree : The Storm over Critical Buddhism*, edited by J. Hubbard and P. L. Swanson. Honolulu : University of Hawai'i Press, pp. 298-313.
- Lopez, Donald S. Jr., ed. 1988. *Buddhist Hermeneutics*. Vol. 6, Kuroda Institute Studies in East Asian Buddhism. Honolulu : University of Hawai'i Press.
- , ed. 1995. *Buddhism in Practice*. Princeton Readings in Religions. Princeton N. J. : Princeton University Press.
- , ed. 1995. *Curators of the Buddha : The Study of Buddhism under Colonialism*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Mohr, Michel. "Note critique : Vers une «démystification du Chan»." *Études Chinoises*, Vol. XIV, no 1, 1995, pp. 135-144
[Faure 1993 と臨むの神話]
- Odin, Steve. 1982. *Process Metaphysics and Hua-yen Buddhism : A Critical Study of Cumulative Penetration vs. Interpenetration*, SUNY Series in Systematic Philosophy. Albany : State University of New York Press.
- . 1995. Derrida and the Decentered Universe of Ch'an/Zen Buddhism. In *Japan in Traditional and Postmodern Perspectives*, edited by C. W. Fu and S. Heine. Albany : State University of New York Press.
- . 1996. *The Social Self in Zen and American Pragmatism*, SUNY Series in Constructive Postmodern Thought. Albany : State University of New York Press.
- Ricœur, Paul. 1990. *Soi-même comme un autre*, L'Ordre philosophique. Paris : Seuil.
- . 1992. *Oneself as Another*. Chicago : University of Chicago Press.
- Ruegg, Seyfort D. 1995. Some Reflections on the Place of Philosophy in the Study of Buddhism. *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 18 (2) : 145-181.
- Sawada Anderson, Janine. "The Rhetoric of Practice in Early Meiji Rinzai Zen," paper presented at the International Association of Buddhist Studies, Lausanne, Switzerland, August 27, 1999 (unpublished).
- Sharf, Robert. 1993. The Zen of Japanese Nationalism. *History of Religions* 33 (1) : 287-296.
- Tillemans, Tom J. F. 1995. Remarks on Philology. *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 18

(2) : 269-277.

Victoria, Brian. 1997. *Zen at War*. New York and Tokyo : Weatherhill.

Williams, Duncan Rykuen, and Christopher S. Queen. 1999. *American Buddhism : Methods and Findings in Recent Scholarship*. Curzon Critical Studies in Buddhism. Richmond, Surrey, UK : Curzon. [附録Bは一八九二年以降アメリカで書かれた仏教関係の学位論文のリストを含む]。

Wright, Dale S. 1998. *Philosophical Meditations on Zen Buddhism*. New York : Cambridge University Press.

Yamaguchi, Zuihō. 1997. The Core Elements of Indian Buddhism Introduced into Tibet : A Contrast with Japanese Buddhism. In *Pruning the Bodhi Tree : The Storm over Critical Buddhism*, edited by J. Hubbard and P. L. Swanson. Honolulu : University of Hawai'i Press, pp. 220-241.

注

(1) 『白隠和尚全集』巻五、一四五頁（龍吟社、一九三四年）。伊豆山格堂『遠羅天釜』（春秋社、一九八五年）、一一八頁。
(2) 『白隠和尚全集』巻五、二六八頁、芳澤勝弘訳注『於仁安佐美』白隠禪師法語全集第二冊（禪文化研究所、一九九九年）一四三頁。ここでは白隠禪師法語全集のテキストに従ったが、読みやすさのため片仮名を平仮名に改めた。

(3) 本人が六十歳になってから書いた序文には反省が見られるが、反省の内容は定かではない。おそらく自分の四十代のナイーブな表現であろう。「通讀一過、訂正すべきもの無きにあらず、而も敢て之を訂正せず。今や予齡耳順に餘り、不惑の齡に成る本書を以て思想、信仰の變化を示さんと欲すればなり。」（『禪學批判論』二頁、傍点は筆者による）。

(4) 『禪學大辭典』六七五頁の「禪学」の定義。

(5) これは「學」の理解が変わったということと深く関わっている。たとえば洪川宗溫（今北・蒼龍窟、一八一六―一八九二）の時代には「實學」の解釈がすでに著しく異なっていた。「實學」は朱子学の用語であるが、洪川はそれを「眞實の修行」（つまり見性）と理解していたのに対して、同時代の一般的な解釈はそれをむしろ「西洋風の実用的な知識」（つまり技術）と理解しはじめた。当時の宗門「教育の葛藤」に関して一九九九年の Janine Anderson Sawada “The Rhetoric of Practice in Early Meiji Rinzai Zen”（明治初期の臨済禪における行のレトリック）という示唆に富む発表

禅学には方法論がありうるか。（Michel Monr）

は詳しい (Conference of the International Association of Buddhist Studies, Lausanne)。

- (6) 編纂者柳田聖山氏の「あとがき」によると、久松の講義は昭和二十年十月六日より始まった。「禪文化研究所紀要」創刊号、六三頁。

- (7) 第一の理由は歴史的である。明治五(一八七二)年六月に教部省は教導職管長の制度を導入した。その時点で「禪宗」という宗派の枠を設けた。しかし、それが日本仏教に根拠のない強引な政策だったので、猛反発が生じ、二年足らずでそれを撤去した。明治七(一八七四)年二月に曹洞宗と臨済宗という宗派の存在を認めた。さらに明治九(一八七六)年二月に黄檗宗の独立を許可した。「望月佛教大辭典」巻六「年表」四一七―四一九頁参照。従って、宗派としての「禪宗」という呼称は明治の官僚が考え出したものにはならない。他方では、「禪宗」の意味を最大限に展開させたのは道元である。「辨道話」には次の一節が含まれている。「しめしてはいく、いまこの如來一大事の正法眼藏無上の大法を、禪宗となづくるゆゑに、この問きたれり。しるべし、この禪宗の號は、神丹以東におこれり、竺乾にはきかず。」(T. 81 No. 2582 p. 18a14-15 原文の片仮名を平仮名に直し、濁点を加えた)

- (8) 一九九九年六月二日の東京大学教授石井洋二郎氏による「フルデュー社会学と日本」の講演記録より。http://www.bekkoame.ne.jp/~n-izanag/AABMFJ/conferences/ishi.html.

- (9) Hori (2000).

- (10) <http://www.ms.kuki.sut.ac.jp/KMSLab/nakita/gdmhp/gdmhp-j.html>.

- (11) 袴谷氏は『批判仏教』で「我々の学問分野でも、解釈学という曖昧で怪しげな方法が改めて流行り始めようとしているようだ…」と嘆いているが、その徴候がどこにあるかを明記しない(一四四頁)。

- (12) 「他者のような自己自身」五頁で使われる表現をもじった。「主体」の問題は、当然、デカルトの「コギト」とその処理の仕方に深く関わってくる。

- (13) リクトールの「他者のような自己自身」には、「バーフィットと仏教との類縁性を指摘する文末註が見られる。そこに Derek Parfit (デレンク・パーフィット) の *Reasons and Persons* (Oxford University Press 1986) と Matthew Kapstein による書評が列挙されている。パーフィットによる自己の理解と仏教の無我論の異同が広く *Philosophy East and West* 誌で論じられてきた。同く Kapstein, Matthew. 1989. 01. Collins, Parfit, and the problem of personal identity

in two philosophical traditions: A review of *Selfless Persons*, by Steven Collins. *Philosophy East and West* 39: 289-298. はやの一環であらう。Collins, Steven. 1982. *Selfless Persons: Imagery and Thought in Theravāda Buddhism*. Cambridge: New York: Cambridge University Press. 以下の学位論文に基づいている著書の書評でもある。

(14) 中国大陸ではすでに一九二〇年代から『成唯識論』(T. 31 No. 1585)に基づいた批判的な仏教研究がさかに行われたことは興味深い。これに関して Lin, Chen-kuo 林鎮國 1997 参照。

(15) 「WCRRP 町田宗夫発言事件」、「創」(一九八四年)「一三〇—一三三頁」。

(16) 袴谷憲昭『批判仏教』九三—九七頁。

(17) 戦争責任を追究する出版物として、たとえば Sharf (1993), Heisig and Maraldo, eds. (1994), Victoria (1997) などがある。仏教倫理に関する関心が高いことを示す証拠としてオンライン機関誌 Journal of Buddhist Ethics (<http://jbe.la.psu.edu/>) が挙げられる。

(18) この疑問の裏付けに関して Hubbard (1997) を参照されたい。

(19) Hubbard (1997) の論題。

(20) 二〇〇〇年度日本仏教学会の際に配付されたレジюме。

(21) 二〇〇〇年度日本仏教学会の際に配付されたレジюме。

(22) 『禅思想の批判的研究』六二頁。

(23) 原文は Poincaré, Henri. *La valeur de la science*. Paris: Flammarion, 1905. Bibliothèque de philosophie scientifique, p. 26. 田邊元訳『科学の価値』では「象を唯願微鏡に依つてのみ研究した自然科学者は此動物を充分に知ると信ずるであらうか」となっている(岩波書店「一九一五年」三二頁)。ポアンカレ(一八五四—一九一二)による象の喩えの使用が仏教の有名な「衆盲」の比喩と酷似していることも興味深い。王様が多数の目の不自由な人を集めて象を触らせて、それぞれの人に見解を求めた話ですでに「阿含」の漢訳に含まれており、『大樓炭經』卷第三などに見られる(T. 12 No. 23 p. 289c18-c290a04)。後に『大般涅槃經』(北本)卷第三十二(T. 12 No. 374 p. 556a09-a21)を通じて、この比喩はさらに禅籍の『碧巖錄』(九四則、頌の評唱)に採用される。ポアンカレが翻訳された仏典からヒントを得たという逆輸入説も十分考えられる。『大般涅槃經』には「象が仏性を喩える」(象喩佛性)という明確な説明禅学には方法論がありうるか? (Michel Mohr)

も見落とせない (T. 12 No. 374 p. 556a20)。

- (24) 久米訳の「どっちかすの回答」は原文では「une réponse hésitante」となっており、直訳すれば「躊躇した回答」、つまり「象はそれのみだろうか」という問い掛けに対する自信のない、曖昧な回答である。顕微鏡の尺度では、全体が見えないので「違う」というのはつきりした判断ができない状態に陥ってしまう。

- (25) 原文は Eliade, Mircea. 1964. *Traité d'histoire des religions*, Payot/Éditions de la Sorbonne, Paris: Payot, p. 11. エリアーデは序文で、この『宗教概論』の内容が Bucarest 大学での講義、そしてパリの École des Hautes Études の一九四六年と一九四八年の講義に基づいているところが多いと述べている。

- (26) 哲学に関しても、厳密に言えば、複数の哲学の流れを想定しなければならない。古代ギリシャ哲学の場合、「sophia」(智慧)を指していたとすれば、宗教に近い探求だったかも知れない。究極、絶対を模索する動きが学問の動機だとは言え、特にカント以降の哲学には、究極を説明しようと試みる哲学が激減したと言えよう。したがって、宇宙のさまざまな問題を理論化、体系化して、その理解に努めることが現代哲学の主な傾向であろう。自分が唱える理論を自分の個的な生き方に徹底させた現代哲学者のことは知らない。そこに宗教との相違点の一つが見られるのではないだろうか。むしろ、これは哲学に限定したことなく、研究に携わっているすべての人の在り方に関しても考えあわす必要があると言えよう。

仏教をいかに学ぶか 仏教研究の
方法論的反省 ・編集権者との協定により校印省略

2001年10月20日 発行

編集者

日 本 仏 教 学 会

代表者 小 川 一 乗

(日本仏教学会西部事務所)

発行者

井 上 一

印刷者

田 中 雅 博

発行所

株式
会社

平 楽 寺 書 店

604-8691 京都市中京区東洞院通三条上ル

電話075-221-0016・FAX075-221-0169